英雄譚の世界的範型と日本文学

松前　健

I　英雄説話の範型論

古代の叙事詩や伝説に語られる英雄の生涯には、一定のパターンがあり、単なる個人の一生の体験の描写もしくは追憶とは異なる、共通な話根が、常に束になって組み合わせられていることに著目し、その範型の抽出を試み、世界の数多くの英雄譚、ことに欧洲のそれらを比較して、その中から古代人の持つ英雄像を、把握しようとする試みは、近年欧米の説話学界の話題の中心となっている。

英雄譚を構成する数多くのモチーフ、例えば超自然的誕生とか、怪物退治とか、他界訪問と試煉とかのモチーフは、それぞれアニミズムとか呪術思想とかイニシェーションとか、色々な古代的信仰によって、説明できるかも知れない。然し、英雄譚には、なぜかこれらが常に一束になって結合して居り、生涯全体が、類似したパターンを形づくっているのである。

ヘラクレスでもテセウスでもヤソンでもオエディプスでも、不思議に幼時から同じような運命を与えられ、野山に棄てられ、動物に育てられ、また牧者などに拾われて、成長し、また色々な厄難に逢い、あるいは故郷を出て、各地を漂泊・流浪するなど、みな共通しているのである。そして彼等はみな不思議と若死をしている。というよりは、むしろ若くして非業な死をとげているのである。こうした共通性の原因は、一体何なのであろうか。その根本心意は、どのようなものなのであろうか。またそうした範型の英雄説話の分布範囲は、どうなのかということが論議の中心であった。

私が今回、これを採り挙げて見たのは、この範型が、東亜や日本では、どの程度まで当てはまるのか、また日本の英雄譚には、果してこの範型には当てはまらない、独自な範型は、存在しないのか、ということの検討をして見たいからである。これを採り挙げた意義は、これを通して、古代・中世の民衆の英雄像、つまり理想的人間像を窺い見、これが文芸作品の中に表われる形を知りたいからである。

さて、この範型の存在に気がつき、英雄譚の中からこれを抽象

しようとした最初の学者は、ヨハン・ゲオルグ・フォン・ハーンである。彼は一八六四年に、民間説話の中から、幾つかの話形を抽出したが、後年一八七六年（彼の死の七年後）、出版された民間説話に関する理論的な研究書『伝説学研究 *Sagwissenschaftliche Studien*』の中で、特に、生まれたばかりの嬰児のとき、野山に棄てられる話根が、中核となって、「アリアン人の追放と帰還の公式 *Arische Aussetzungs-und Rückkehr-Formel*」という論文を書いている。

もちろん、これは題名の示す通り、古代欧州の英雄譚を扱ったもので、ギリシャのオエディプスをはじめ十四人の英雄たちの伝記から、次の通り十六項目の話根を取り出し、またこれらを四つの基礎群に分けた。

(1) 英雄の型やぶりの誕生
(2) その母親はその国の王女である。
(3) その父親は神もしくは異人である。
(4) 彼が後年支配者となるという予告。
(5) このため彼は棄てられる。
(6) 動物たちに授乳される。
(7) 子のない牧者夫婦に育てられる。
(8) 元気一杯の若者となる。
(9) 異国での奉仕を求める。
(10) 意気揚々と凱旋し、その異境の地へ帰る。
(11) 最初からの迫害者を殺し、その国を支配。そして彼の母親を解放。
(12) 都市を創設。
(13) 彼の死にかたは異常。
(14) 彼は近親相姦の故に悪評を受け、若くして死ぬ。
(15) 侮辱された下僕の手にかかり、復讐されて死ぬ。
(16) 弟を殺す。

これらの中、(1)から(3)までは I 誕生、(4)から(9)までは、II 若年、(10)から(13)までは、III 帰還、(14)から(16)までは、IV 付加的事項、である。①

五年後の一八八一年に、アルフレッド・ナットは、フォン・ハーンのシエマを、ケルトの英雄説話、例えばフイン、クーフーレイン、アーサーなどのそれに、適用し、多少の修正を加えた。

処で、こうしたシエマを、フロイド流の精神分析学から解釈しようとしたのは、オットー・ランクであり、その『英雄の誕生の神話 *The Myth of the Birth of the Hero*』が、一九〇九年に発表された。彼は欧洲の古代英雄ばかりでなく、オリエントやインドなどの英雄、例えばバビロンのサルゴン王、旧約のモーゼ、インドのカルナ、ペルシアのキロス、イエス・キリストから、中世欧州のジークフリード、ローヘングリンなどまで、その伝説的生涯を挙げて比較し、その共通の大筋を挙げた。それは次の通りである。

(1)英雄は著名な両親の子、普通には王の子として生まれる。(2)その生まれる前には、禁欲とか長い不妊とか、両親の人知れぬ交

り（きびしいおきてや障害による）とかのような、種々な困難なできごとがある。(3)懐胎のさなかか、その前かに、夢とか託宣の形で予言があり、彼の誕生はその父親もしくはその代りの人物に災厄をもたらすだろうという警告である。(4)通常、箱に入れられ水に流される。(5)動物もしくは賤しい人たち（牧者）に助けられる。(6)貧しい女もしくは牝の動物に授乳される。(7)成長後、その優れた才芸でその実の両親に会う。(8)自分の実父に対して復讐する。もしくは認知される。(9)最後に地位と名誉を得る。[2]

以上であるが、ここでは、主として誕生から成長までの過程に焦点がしぼられていて、その成長後の厄難や試練、また冒険やその異常死などの項目についての言及はない。

一九二八年に、ソ連の民俗学者ウラジミール・プロップが、その名著『民譚の形態学』を刊行し、ロシアの古い昔話の中に、こうした範型を抽出しようとした。すなわち本格昔話の共通の構造として、三十一箇のモチーフ（プロップは「主人公の「機能」という語を用いる）に分け、その基本的範型を明らかにしようとしたが、[3]それらの素材となる昔話について、七種のグループに分け、表とした。その第一表として、やはり同様な英雄型が掲げられ、英雄の未生記として、王国の状況、子宝のない王が神に祈るとか、特異な懐妊や、異常な誕生形態、予言、主人公の急激な成長ぶりや特異性、敵役（かたきやく）の登場とその性格、闘争、勝利と幸福などのモチーフを含む型が示されている。[4]

このプロップの英訳は、一九五八年になされ、欧米の学界に大きな影響を与え、後のレヴィ・ストロースらの構造主義的な分析研究のいわば先駆的な業績であった。

然し、このプロップの分類は、昔話の主人公の生涯の範型であって、実在の歴史的英雄の伝記的物語や、これに基づく語り物などの範型ではない。後述するように、昔話とこれら英雄譚とは、その心意や機能にかなりの相違がある。語り物に見られる悲劇性などは昔話には、見られないから、英雄の末年の悲劇的終局などは、モチーフとしては欠除しているのである。

処で、ユング派の精神分析学から神話の分析を行なっているジョセフ・キャンベルが、その著『千の顔を持つ英雄 *The Hero with a Thousand Faces* 1956』において、彼のいう「単一神話 monomyth」の基本的構造を、次のような筋書きから成り立っているとしている。これは、神話的英雄の果す数々の冒険と試煉の荒筋である。

神話の英雄は、日常のすみか、もしくは城を出て、かどわかされるか自発的に出かけるかして、冒険の途につく。そこで、道をさえぎる影のような霊に出逢うが、これを打破るかその力を融和して、闇黒の王国に入る。あるいは敵に殺され、死の世界に降りる。その境界を越え、未知であるが、不思議に好意的な霊のいる世界に旅をする。そのある者は彼を脅し、試煉を与え、また魔法の助けを与える。その巡歴のどん底で、激しい苦行をさせられ、これをくぐり抜ける。英雄は母神と聖なる結婚し、父神によって認知され、彼自身神に昇格し、示現する。もしも、そこでの神や

精霊たちが好意的でない場合には、花嫁盗みとか火盗みとかのような非常手段に訴える。最後の仕事は、帰還であるが、もし神々や精霊共が英雄に恩恵を授ける場合には、その加護を受けて、出かけ、それと反対の場合は、逃走し、追跡される。然し、彼等の力は境界点までに留まり、英雄は、恐怖の国から帰還し、あるいは蘇生する。彼がもたらすその福祉によって、彼は世界を再建する。[5]

キャンベルの立てたこの範型は、ギリシャ神話のテセウス、ヤソン、ヘラクレス、オデッセウスなどの、いわゆる英雄求婚譚に含まれるもので、日本の神話伝説では、『古事記』のオホナムチの根の国行きや、中世の諏訪本地の甲賀三郎譚となる。

キャンベルは、精神分析派であったから、こうした神話のモチーフの奥に、人間の深層の恐怖や願望、自我などが、象徴的に表われると考えたし、またそうしたシンボリズムは、古代から中世、近代へと社会が発達して行っても、形を変えながら持続すると考えた。ジョセフ・L・ヘンダーソンなども、同様に精神分析の立場から、英雄譚の構造の中から一定の範型を考えた。

(1) 奇蹟的であるが、貧しい誕生。
(2) 超自然的な力の発揮。
(3) 衆人にぬきんでる。
(4) 邪悪との闘争と勝利。
(5) 傲慢さのために失脚ないし重大な過誤。
(6) 詐謀にかかり、または自己犠牲による悲劇的死。

以上であるが、これはやや具体性を欠いた一般的な分類となっている。然し、それにしても、彼はそうした範型の英雄像は、個人の自我意識の投影だと考えた。最初は弱小で非力であるが、強力な守護者の出現による力の獲得、それにより超自然的な事業を次々と果す。然し、最後は力の限界によって死ぬ。人間が、己れの力の弱さを自覚するという、自己認識の産物である、という。[6]

Ⅱ　ラグラン卿とヤン・ド・フリースの範型論

精神分析の方面からの説話の研究は、ややもすれば、その比較さるべき説話の話根のこまかい相異などは閑却視し、その根底をなす下意識に潜在する我欲やこれを制御する個我などの象徴的な表われの説明ばかりに終始し、実際に語られ、拡布しているそれらの説話が、どの程度までその範型に合致しているかどうかを検証する作業を欠いていた。その意味で、実際に語られている英雄説話をできるだけ沢山集め、これらの中からできるだけこまかいモチーフを抽出し、この共通な範型を浮彫りするとともに、また逆に個々の説話を点検し、その項目の幾つまでが合致するかを検証しようと試みる、実証家が現われた。すなわち、ラグラン卿である。その範型は次の二十二項に分けられる。

(1) 彼の母親は王室の乙女である。
(2) その父親は国王である。
(3) しばしばその母親の近い親族である。

(4) 懐妊の環境は異常である。
(5) 彼はまたある神の子であるとも評判される。
(6) 誕生にあたり、しばしば彼の父親によって殺害が企てられる。
(7) 彼は逃げ出し、そして、
(8) 遠い国で養父母に育てられる。
(9) その少年時代については何も語られない。
(10) 成人して後、もとの生国に帰還、またはその将来の治らすべき国に行く。
(11) その国王、もしくは巨人、龍、または野獣に対する勝利の後、
(12) 彼は一王女と婚する。しばしば彼の先任者の娘である。
(13) 国王となる。
(14) 暫らく彼は平穏に国を治める。
(15) 法律を制定する。
(16) 後年、彼は神々の恩恵を失い、または部下の信頼を失い、
(17) 王座と都から追出される。
(18) 彼は神秘的な死をとげる。
(19) しばしばある丘の頂上で。
(20) 彼の子供たちは、あったとしても、王位を継がない。
(21) 死体は埋葬されないが、それでもやはり、
(22) 彼は一つ以上の墓を持つ。

以上であるが、ラグランは、この範型を、オエディプス、テセウス、ロムルス、ヘラクレス、ペルセウス、ヤソンなどのギリシャの英雄からジョセフ、モーゼ、エリアなどのヘブラの予言者、ジークフリート、アーサーなどの中世欧洲の英雄などに当てはめ、その伝説的生涯について、それらの項目に、どの程度合致するかを検出した。それによると、オエディプスは二十二項目の中の二十項目、テセウスは二十項目、ロムルスは十七項目、ヘラクレスは十七項目、ペルセウスは十六項目、ヤソンは十四項目であり、ヨセフは十二項目、モーゼは二十一項目、エリアは九項目、ジークフリートは九項目、アーサーは十六項目が、それぞれ合致することが判った。[7]

これで見ると、ラグランの資料範囲は、ほぼ欧洲の古代の事例に限られ、それに若干のオリエント資料と、中世欧洲の資料が付加されているにすぎない。大体が欧洲を中心としている。オリエントの資料でも、ギルガメッシュ、サルゴン、キロス、ルスタム、キリストなどは、ほぼこれに合致するであろうし、また更に東に進んで、アーリア人の領域であるインドでも、クリシュナなどは、その範疇にいる。

然し、全体的な色彩が、どう見ても、ヨーロッパ的であることは、否定できない。その範型そのものの抽出の最初の基準は、多分オエディプスやテセウスなどのギリシアの英雄の物語であったと思われるのである。

ここで、オランダのヤン・ド・フリースが、もっと視野を広げ、もっとゆるやかなカテゴリーを立て、十個の項目にまとめたので

ある。

Ⅰ　英雄の未生記

A母親は処女で、ある神によって懐胎させられ、もしくは父親との通常の婚姻方式を越えた交りで、受胎する。ゼウス大神が金の雨に化して、王女ダナエのもとに訪れ、婚して、英雄ペルセウスを生む話は有名である。

B父親は神。これは通常ギリシアではゼウスとかアポロンとか、天空や太陽の神が多い。

C父親は動物である。それはしばしばある神の扮した姿である。アレクサンダー大王の母オリンピアの寝床を、大神ゼウスが蛇体となって訪れ、受胎させた話は有名である。

Dその英雄児は、近親相姦の結果の子。アイルランドのクーフーレンは、コンコバル王とその娘デヒティレの子とされる。

Ⅱ　英雄の誕生

A異常な誕生ぶり。ゼウスがディオニソスを、そのカカトから生み、アテネを、その頭から生んだなどはそれである。ロシアの英雄ログダイなども、母の死体から生まれている。

Ⅲ　英雄の幼少の時の厄難

A子供は悪い夢の告げを受けた父親によってか、あるいは相姦などの恥を隠そうとする母親によってかで、野山にさらされる。またこの中に、籠や箱に入れて海や河に投ぜられる、ディオニソス、モーゼ、サルゴンなどの型も含まれる。

B棄てられた子供は動物に授乳される。a鳩、b牝狼、c牝熊、d雌鳥、e雌牛、f山羊、g雌犬、hジャッカル、i鷲等。

Cその後、牧者などに発見され、引き取られる。クリシュナ、キロス、ヘラクレス等。この養育者はa牧者のほかに、b漁夫、c庭師などがある。

D神話的な存在（神や精霊、神仙等）が養父となることもある。

Ⅳ　英雄の育ちかた

A英雄は幼少のときから抜群の力、勇気、特別な能力を持つ。

Bこれと逆に、その子供はしばしば発達が遅れ、オシか、精神的欠陥者のふりをする。デンマークの英雄オファが若いころオシであり、ハムレットが狂人であったなど。

Ⅴ　英雄はしばしば不死身を得る。

ギリシャのアキレス、ミノス、ドイツのジークフリート、ペルシアのイスカンディアル、インドのクリシュナなど。必ず最後は、奸策によって、唯一の急所を知られ殺される。旧約のサムソンも同様である。

Ⅵ　龍やその他の怪物との闘い

最も英雄的な功業の一つとして数えられ、世界中の英雄（ヘラクレス、テセウス、ベレロフォン、アポロン、ヤソン、ルスタム、ジークフリート、ビォウルフ等）がこれを行なっている。

Ⅶ　英雄は乙女を得る。通常、大変な危険をおかして。

ペルセウスとアンドロメダなど最も有名。

Ⅷ　英雄の黄泉国下り。

ギルガメッシュ、ヘラクレス、オデッセウス、『カレワラ』のワイナモイネンなど。

Ⅸ　英雄は若いとき追放されるが、後年帰還し、敵を打破る。ある場合には、そんな困難をおかしてまでして、得た領国を去らなければならぬことになる。

これはインドのパンダヴァ家の英雄たち、ペルシアのキロス、ギリシアのヤソン、ペレウスなど。

Ⅹ　英雄の死

英雄たちはしばしば夭折をする。アキレス、ジークフリート、クーフーリンなどがそれである。また多くの場合、彼等の死は奇蹟に満ちたものである。ローマのロムルスは天に昇り、ヘラクレスは、オエタ山上で、神となり、テセウスは、スキロスで岩から海中に投げおとされる。[8]

以上であるが、これなら確かに、ラグランの二十二箇のカテゴリーよりは、より一般性・世界的普遍性を持っている。

こうした英雄譚の主人公は、古いギルガメッシュとかヘラクレスなどの存在は別として、サルゴン王、キロス王、マルコ王子、アレキサンダー大王など、歴史人物として確証するものも少くない。もとより実際のその人物の生涯はそんな類型的・神話的なものではなく、なまの個性のあるものであったであろうが、年月が経つにつれ、多くの語部たちの手によって、しだいにそうした超自然的な色彩が加わり、そうした類型的なモチーフが加えられて、典型的な英雄像が結晶するのである。

ペルシアのキロス大王は、BC五二九年に死んだ実在の王者であったが、ギリシアの史家ヘロドタスが、ペルシアを旅行したBC四五〇年ごろには、すっかり伝説化していて、やはり誕生時に、霊夢と予言があり、国王がこれを殺そうとし、山に棄てるが、彼は牧者に拾われ、動物と一締に育てられるのである。[9] ヤン・ド・フリースによれば、王の死後約半世紀経ったBC四八〇年ごろには、こうした形で、彼は完全に伝説化されていたのであろうと推定している。

然し、時としては、その伝説化がもっと短時日の間になされることもある。AD一三八五年からAD一四五六年まで生きていた、実在のハンガリーの戦士フンヤディなどは、その死後数年後に、伝説化して来た徴証がある。[10]

アレキサンダー大王なども、死後間もなく、側近の間から伝説が発生し、しだいに雪ダルマのようになって、中世には完全な神話的英雄と化した。

彼の母オリンピアの受胎は、大蛇に化したゼウス大神によってなされたといい、これが更に訛伝して、エジプト人の魔法使の王ネクタネブスが蛇に化けて訪れたのだとも語られたりした。また不死の水を求めて、天国に旅をしたり、巨人や食人鬼や人面の馬や犬などと闘ったりしている。

ラグラン卿は、このような歴史的実在の人物が神話化するのは、必ずや有識者の文学的作物であって、決して民衆の所産ではないと述べているが、それは、確かに傾聴すべき一面がある。

アレキサンダーの母の受胎譚などは、その師のアリストテレスと本人および側近の間にかわされた書簡集などに、既に語られていたらしく、大王自身も生前、己れをヘラクレスの裔と称し、エジプトに遠征したとき、ゼウス・アンモンの神殿に詣で、彼自らの神性の証しとした。大王自身、己れの出自を単なる一国王の子とするより、神の子であることを主張しようと欲したのである。[11]

然し、何れにせよ、こうした実在の人物は、そのなまの個性とその現実的功業だけでは、民衆の英雄像にはならない。これが真の英雄となるには、むしろなまの個性は忘却され、その代りに幾重にも、類型的な神話的なモチーフが加わり、典型的な説話の英雄になる必要がある。古代の民衆に取って、真の英雄は、情意や愛情を持つヒューマニスティックな個性の持主でもなく、現実政策の実行者でもない。神の子として生まれ、野山にさらされ、ウツボ舟で流されるなど、幾多の厄難や試煉を越え、悪龍や怪物と闘い、美姫の愛を得、幾度も死んでは蘇生し、また漂泊流浪して、最後には若くして非業の死をとげる人物こそ、彼等の真の英雄なのである。ラグランの二十二個のカテゴリー、およびヤン・ド・フリースの十個のカテゴリーは、一つの試案ではあるが、古代的な民衆の抱く、人間の理想像なのであった。

この中に画き出された英雄の本質は、一つの理想型にすぎない。むしろ非個性・類型的・非現実的なものなのであるが、古代人はこのワクに当てはめて、その基準に従って彼等の英雄を評価した。そうして、そのワクに近い人物がいれば、これを真の英雄として讃美し、そたその死後にはそのなまの記憶や個性の印象は忘れ去られ、神話的な尾ヒレがついて、ワク通りの人物となってしまうものである。

こうした英雄の説話化は、多くの場合、吟唱伶人などの手によって、みがきがかけられて行くことは、ラグランや、ヤン・ド・フリースなどもくりかえして説いた所である。

ヤン・ド・フリースは、こうした英雄説話が形成して行く過程には、「伝承の遠近法」という原理が働くことを論じた。一旦英雄像ができあがると、多少時間的・空間的に異なった人物でも、語り部の手によって、この同一の舞台に立たせられ、その中に吸収させられることである。ちょうど、近くから見たアルプスの山の嶺々は、お互いが相離れて聳えているが、遠くからながめると、巨人たちが互いに手をつないで立っているように見えるのと同じく、古い「民族大移動期」のような変動期は、そうした英雄たちがキラ星のように登場し、活動する晴の舞台のように、民衆には感じられたのである。[12] ラグランは、こうした説話の時代錯誤性（アナクロニズム）を論拠として、「英雄時代」の非実在性を主張したが、ド・フリースは、こうした「英雄の語り物が始まり、その機能がまだ盛んに発揮されている時代」であるとし、文芸史的概念であると考えている。[13]

然し、それにしても、こうした英雄の本質を形成するこれらのカテゴリーの、起源は一体何であろうか。またどこからどこまでが説話の伝播によるものであろうか。

この英雄型について、その幾多の試煉や死と蘇生、他界行きのモチーフを、イニシェーション儀礼の反映と見、このオーデヤルによって解釈したのは、従来、多くの学者の見解である。エリアーデなども、これが古代のイニシェーション儀礼の神話的原像であろうと延べている。[14]

また前に述べた精神分析学派のヘンダーソンや、キャンベルらは、これらをイニシエーションに結びつけ、また人間の深層心理に由来するものと見、これらのモチーフの中に自我の形成の過程を考えようとしたのであるが、然し、それは、説話全体を一貫する中核理念がそうだというに過ぎない。

個々の具体的なモチーフである、野山に棄てられ、野獣に育てられ、牧者などに引き取られるなどの、具体的な話根などは、どう見ても、伝統的なある文化の中から生まれたもので、ましてやこれらがいつも束になって結びついているということは、やはり一種の説話上の伝播関係を推定せざるを得ない。事実上、この典型的な説話は、欧亜を中心として広がっているとは言え、それはせいぜいインド位までで、中国、朝鮮、日本などの東亜には、それほど行き亘っているとは考えられないのである。

ともあれ、この英雄型の起源は、どこかで何等かの形であったに違いない。私は、ヤン・ド・フリースなどの王権祭式説が最も適当であろうと考えている。古代の英雄は、常に自己を神格化し、祭式ドラマにおける神話上の英雄と己とを同一視しようとした。王権祭式は、ガスターやフックらによれば、創造神話の口唱、死と復活の儀や試煉、神の冥府下り、幾つもの頭のある悪龍との闘争と勝利、豊饒（みのり）のための聖婚、登極、勝利の神幸式などの一連のドラマ的行事があり、王がこの主役をつとめ、原古の神との同化と、その創造行為の再現により、宇宙国土の更新とその秩序の恒久化を図ったのである。[15] 原始的な思考では、王のカリスマと国土の安寧とは、融即しているのである。

王はその祭式において、原古の存在としての神に扮し、渾沌の精たる多頭の巨龍を退治する。また大地の豊饒の精たる女神――巫女がこれを演じる――と婚し、また一旦殺されて冥府に下り、後に復活し、再び登極する。この祭式ドラマを毎年新年祭において繰返すことによって、王は己れ自身を、完全に神話上の存在に帰せしめることができるが、同時に、国土は原古に復帰し、新生のいぶきをもって、一陽来復となると信じられた。

王の生前、側近の家臣や伶人たちは、その行事のたびごとに、彼の個性的な業績の上にその祭式上のイメージを、ミックスさせて、その頌辞 panegyrics（即興的讃歌）を歌いあげ、またその死後は、そうした神秘的な色彩を、更に大きく印象づけ、理想型のパターンに基づいて王の輝やかしい生涯や功業を彩り、哭辞 laments（挽歌）に歌いあげる。

こうしたものが素材となって、やがて英雄の一代記を語る長編の語り物が、伶人たちによって作られ、種々な民譚的モチーフが加えられて、益々範型的な人物像が結実して行く。

ド・フリースは、このように英雄叙事詩の形成を考えた。[16] 確か

にこれは首肯し得る点が少くない。叙事詩の英雄譚は、確かに、しばしば王位や王権と関係しているし、また龍退治や試煉、死と蘇生、冥府下り、美姫との結婚などのモチーフも含まれている。この祭式の原像として、こうした半神半人の英雄の語りが生まれるということも、十分考え得ることである。

然し、もちろん、英雄の生涯は、単にそうした王権祭式とだけ結びつけて解釈し得るものではない。幼時、箱や船に流されたり、動物に育てられたりするモチーフは、また別の信仰や儀礼と関係があるであろう。原始的なイニシエーションと結びつけるエリアーデなどの説も、当然考慮に入れてよかろう。

然し、ここで、ド・フリースが、見落している重大な点は、これらの多くの英雄叙事詩において、英雄は一般に不遇な生涯を送ったものが多く、「王位についた勝利者」ではなく、これにつかないまま、若くして非業の最期をとげる「敗北者」であることである。

公式の王者なら、確かに頌辞（パネジリックス）や哭辞（ラメンツ）を、伶人たちが歌い、その神威（カリスマ）や功績を讃えるかも知れないが、そうした地位にまだつかない、若い不遇な英雄には、そうしたことは行われるはずはない。この敗北者であり、夭折者としての英雄が、なぜ後世まで讃えられ、その名が語り継がられねばならなかったかは、考えて見る必要がある。

語り物の本質がその悲劇性に存するということは、夙に、W・P・カー、C・M・バウラなどによって指摘されていたし、[17]また

ド・フリースなども、これを強く主張している。ド・フリースは、神話、伝説、昔話などが、単純なストーリー、主人公の類型的性格などで、多く、ハッピーエンドで結んでいるのに対し、ストリーが複雑で、起伏に富み、主人公の波瀾万丈の生涯を、一貫した個性で歌いあげる語り物は、悲劇性を中核として持ち、文芸意識の産物であると述べている。[18]

然し、ド・フリースの挙げた範型の十項目の中の第十の「死」の項目などには、「夭折（わかじに）」が挙げられているが、その死にかたの「非業（ひごう）性」「横死性」については、余り強調はなされていない。

然し、実はこの英雄の悲劇的終焉の共通性は、語り物の起源についても、色々と考えさせるものがある。日本の倭建命や源義経、曾我兄弟などのような事例は後で述べるとして、欧洲でも、ギリシャのヘラクレス、オエディプス、ローラン、ジークフリートなど、みなそうしたパターンを持っている。

C・M・バウラは、世界の語り物を大別し、二種に分けた。すなわち(1)巫覡の語り物と、(2)英雄の語り物、である。(1)は、フインランドの『カレワラ』に、主人公ワイナモイネンが、さまざまな超自然力を利用し、魔神を打破り、功業を建てるような神話的叙事詩を指す。(2)は(1)の受け継ぎではあるが、むしろそうした神話性・超自然性は薄れ、人間的な武人などが活躍する軍記物である。(1)には、悲劇性は全く見られないが、(2)には悲劇性が濃厚であるという。

私はこうした点から、英雄の語り物の悲劇性の原因・動機を、

もしかすると、そうした「非業の死」をとげた人物に対する慰撫的祭祀にあるのではないかと考えている。

かつて、二十世紀の初めごろに、イギリスのリッジウェイが、『悲劇の起源』、および「非欧州民族の劇および劇的舞踊」などの中で、世界の多くの悲劇、および悲劇的文芸の発生を、死霊の慰撫の祭りから出たと考えたことは、有名である。[19] ド・フリースなども、葬礼や墓前祭における哭辞（挽歌）の持つ悲劇性と語り物との関係を示唆してはいるが、[20] こうした方向からのアプローチは、今後は一層深められるべきであろう。

Ⅲ　英雄の範型の東亜における適用

処で、こうしたラグランや、ド・フリースらの「英雄の範型」は、ギリシャ・ローマや北欧、オリエントなどの、古典的世界についての範型であって、アフリカ、ニューギニヤ、メラネシア、ポリネシア、オーストラリア、アメリカ・インディアンなどの、いわゆる原始民族には、適用できないことは、論を待たないことである。

然しながら、彼等の間にも、いわゆる文化英雄（カルチュアヒーロー）という、一種の神人的英雄の概念がある。その多くは、やはり超自然的な生まれかたをし、あらゆる厄難な試煉をくぐり抜け、邪霊や魔神を征服し、死から復活したり、人間のための文化や制度を創設するのである。

さて、キャサリン・スペンサーは、北米のナヴァホ・インディアンの神話の範型を、次のような項目にまとめた。すなわち、

(1) 英雄の異常な冒険と事業（怪物退治、死の征服など）
(2) 英雄の誕生についての異常性
(3) 動物からの助力
(4) 親と幼少のときから別離
(5) 義父、兄弟、姉妹などの近親者に対する乱暴や敵対
(6) 帰国と名誉

これで見ると、やや大雑把ではあるが、古典的な英雄像と似ている点がないわけでもない。ただ最後に悲劇的な終焉があるわけではなく、ハッピーエンドの形である。また王権に関するモチーフがないのも、当然である。

さて、古典的な英雄範型が、東亜にどれだけ適用できるかは、議論の余地があることであるが、石田英一郎氏は、ラグランの範型を東亜の説話において、検討し、それが東亜では、「予言」のモチーフの欠除が見られること、および英雄の母親に対する強調、およびその半神半人の英雄とその母親とを、母子神として崇拝すること、などが見られることなどを付加的に考察した上で、この範型とほぼ一致していることを、論証した。[21]

処で、韓国の金烈圭氏は、最近、『韓国民間伝承と民話の研究』の中で、この範型を大きく採り上げ、韓国の古い神話や民譚、さらに種々な近世小説まで、これによって検討しようとしている。氏は、Hahan, Lord Raglan, Campbell らの英雄範型を、次のようにまとめ、HRLC 類型と名づけている。ここにはド・フリ

ースは含まれていない。

① 高貴な血筋。懐妊は異常。
② 夢ないし託宣。
③ 棄児。
④ 下賤者ないし野獣による傅育。
⑤ 帰国と復讐。
⑥ 都城創建。
⑦ 特異な死。

この構造から見た東明王・朱蒙の伝説は、次の共通型があるという。すなわち、

(1) 解慕漱と柳花との神婚（強姦）……共通型①
(2) 卵が棄てられる（棄児型の変形）……共通型③
(3) 群馬不履百獣擁衛……共通型④
(4) 夫余の王子らの迫害と脱走・亡命……ラグランの範型の(6)と(7)
(5) 亀鼈の渡河
(6) 建国……共通型⑥
(7) 昇天と死……共通型⑦

氏はこのほかに『三国遺事』に見える、朴赫居世、金閼智、昔脱解などの、新羅の王祖伝説や、近世の『洪吉童伝』『崔孤雲伝』などの李朝小説にもこの型が見られることを述べている。昔脱解王伝説の筋は次の項目に分けられる。

(1) 彼の母親は女国の王女
(2) 彼の父親は多婆那国王
(3) 卵生
(4) 棄てられる
(5) 海に流される
(6) 老嫗によって収養される
(7) 首露王との変身術競争
(8) 設埋礪炭の詭計
(9) 王女と結婚
(10) 国の綱紀を立てる
(11) 登極
(12) 王として神異を示す
(13) 死後神異を示す
(14) 遺骸は東岳上に安置され、そこが聖域になる
(15) 神格化される

これも、この範型にほぼ一致することは、明白である。

然し、金氏は、こうした欧洲型ともいうべきＨＲＬＣ類型よりも、実際の韓国の英雄説話にある共通モチーフから、次の項目を抽出し、これを模範形式であるとした。

(1) 父母は高貴な身分、あるいは神秘的な交媾を行なっている。
(2) 主人公の誕生には障害や難関が伴なう。誕生が長い間子供がなかった末にとか、でなければ紆余曲折の末に誕生する。
(3) 誕生自体に神秘性が伴う。あるいは誕生が異常な経路をたどる。

(4) 棄てられるか、または出郷する。あるいは迫害を受ける。
(5) 獣または老嚢の加護を受ける。
(6) 異績を行なう。
(7) 名をあげて都城を創建するか、氏族・流派などを創始する。[22]
(8) 神秘的な死をとげて神格化される。

以上であるが、この中に、HRLC型モチーフがある程度形を変えて含まれていることは確かである。然し、ここに扱われる範型は、朝鮮の素材を、HRLC型の西欧の範型を意識しながら作った英雄型にすぎない。

HRLC型は、英雄の本質を神と人の媒介者であると考え、従って半神半人の存在で、人類文化や社会の建設者であるとする、人類共通の思想に基づいてできあがった説話の範型には違いないが、これに色々な西欧の風土や人情が結びついたモチーフが多い。このように西欧の古代の神話伝承や語り物の中からこうして抽き出した範型は、必ずしも東亜のそれとは全く同一であろうはずはない。西欧型のそれをそのまま東亜の英雄像に応用して、その基準に、どこまで当てはまるかを検出することは、果してどの程度の意味があるであろうか。

金烈圭氏の扱った説話は、大体が古代の神話に焦点が置かれ、王朝の起源というような政治的な説話であるため、悲劇的なモチーフなどは語られる余地がなかったことにも問題がある。

そうした面では、巫覡（ムーダン）の語る祭文語りなどには、一種の悲劇性がある。ソウル地方の死霊祭のとき、祭次に先立って諷誦される鉢里公主（パーリコンジュ）（捨姫）の神話などでは、国王に世子ができず、七人まで女の子が生まれるので、国王は怒り、七番目の子を箱に入れて流す。流された姫は、老翁・嫗に救われ、育てられる。都で父母の国王夫妻が病気にかかるが、これを姫は知って、薬水を求めて旅に出、神仙に会い、その妻となり、霊薬を得、これをもって死んだ父母を蘇生させ、本人は巫女の元祖となるというのである。これには、幼時の厄難としての箱舟流しや薬水を求めての苦難の旅などもある。これが死霊祭の縁起として語られたのは、崔吉城氏なども説いたように、本来、死んだ霊魂を生き返らせる呪儀の祭文であり、この語りを死霊祭に語るのは、「あの世での再生」を祈るためのものであろう。[23] この神話も、幾つかの異伝があり、この話の終りに、この姫自身も死んで神となるモチーフもある。

パンソリという一種の謡り物の素材とされている幾つかの近世の物語にもそんなパターンのものが多い。『洪吉童伝』なども、①霊夢によるこの主人公の誕生、②迫害と屈辱の後、③家を出、④活貧党の首領として、多くの神異を見せ、⑤兵曹判書という高官に登り、⑥王国を建設、⑦悪魔を退治し、⑧それに掠奪された乙女を妻として迎える、などからなるが、ほぼ英雄の範型に近いことは、金烈圭氏も説いているところである。[24]『金円伝』なども、丸い卵様のものから生まれた金円が、王命で姫をとりこにした怪物を退治し、龍宮に入り、龍女と結婚し、人間の世に戻る。その途中、盗賊に殺されるが、また生き返り、姫をめとり、老女と三

人で家をかまえ、後に神仙となるという筋である。[26] これも、この範型に属すると言えよう。ここでは死と復活のモチーフもある。

Ⅳ　日本における英雄の範型と文芸

ラグランやド・フリースなどの英雄の範型は、それらの項目がまとまった形で結びついている場合は、むしろ少いと言えよう。日本の説話では、英雄の超自然的な誕生は語られても、それを予言したために捨てられたり、流されたりするのではない。日本の英雄誕生譚でも、古くは父や母が神とか動物とかで、半神半人である場合が多く、その懐妊が正常でないため、山中に遺棄されたり、ウツボ舟に流されたりし、猟師や漁夫などに拾われるのである。

日本の英雄も、やはり不遇な英雄が古くから人気のまとであった。これを一般に「判官びいき」というようなことばで、代表させている。九郎判官源義経の奇しくも悲しい生涯を描いた数多くの芸能や文芸作品の根底に横たわる民衆感情を指すのである。

然し、似たような若い英雄の苦難の物語は、義経以前にも、古くからあった。『古事記』に見られる倭建命の物語がこれである。また神代の英雄神であるオホナムチなどにも、そうした面が窺えないでもない。石母田正、西郷信綱などの学者が、西欧の英雄叙事詩の英雄像と類似のものを見出し、これを日本における「英雄時代」の存在と結びつけようとしたのも、確かにうなづける点が少くない。

日本の古典文芸において、特に悲劇的情緒を盛りあげる要素として、貴人漂泊のモチーフがある。折口信夫博士が、これを「貴種流離譚」と呼んだことは有名である。つまりこれは「貴い血筋の人物が、やむなき定めによって、あちらこちらと漂泊流浪し、幾多く厄難や試煉に遭い、最後には死ぬか、もしくは栄耀の地位に就くという筋である。倭建命の漂泊譚も、軽皇子（かるのみこ）と軽大郎女（かるのおほいらつめ）の悲恋物語も、みなそうであるし、『丹後国風土記』逸文の、天女の漂泊譚、『伊勢物語』や『源氏物語』の流離のモチーフ、果ては『義経記』から『岩屋の草子』、説教節の『山椒太夫』『信徳丸』『愛護若』などに至るまで、こうした「貴人漂泊」というテーマを本筋とし、そこに悲劇的理念の発生を見出すことができるというのである。このような型の説話は、折口博士によれば、もともと神の流離の物語を原型としたものである。神は祭りの期間、人間の世に留まり、家々を訪れ、福祉と豊饒をもたらし、やがてその国に還って行く。この神の巡行は、決して悲劇的なものではなく、もともと祭りの思想に基づくものであったが、やがてその意味が忘れられると、その縁起譚は神が何等かの罪を受けて、現世に流離するのであり、そこで色々な辛酸をなめて、その罪はあがなわれ、再び天上に還って行くという筋書きとなる。スサノヲの神やらいや『竹取物語』のカグヤヒメの現世滞留もそうした罪のあがないのためとされている。中世の『愛護若』や『熊野の御本地』などで、この漂泊する貴人が、最後に死んで神と示現する形は、丹後の比治の真名井の天女が、最後に奈具の里に留まって

神と示現し、まつられたという話とも共通な観想を持っている。こうした貴人の流離には、またこの幼な神を奉じ、廻国した神人や伶人の印象の投影があるという。[28] この説は、日本の悲劇文芸の基本的理念の遡源的研究という面で、日本文学研究史上に、大きな光を投げかけた。

『源氏物語』などの研究で知られるアメリカのアイヴァン・モリス教授が、近年その著『敗北の貴人 The Nobility of Failure, 1976』の中で、日本の古代から近代までの悲劇的英雄の伝記的物語を挙げ、その中から日本人の伝統的な英雄像を抽出しようとしたのは、注目すべきである。氏はこの中で、日本人の抱く真の英雄像は、数々の功業を建、栄耀の地位についた「成功の英雄」ではなく、その生涯は不安定と苦難に満ち、その一本気な誠実と勇気を貫き通すが、遂には陰剣な詐謀にたおれる、「敗北の英雄」のそれであるとして居り、またそのモチーフに、倭建命や義経のような流離譚が含まれていることを論じた。[29]

確かに、日本の英雄譚には、こうした「貴種の流離」とか、「誠実者の敗北」というような理念が、重要な核心となっていることは、事実である。またモリスは、その人物の誠実さの表われとして、死に臨んで詩歌を作ることを挙げ、これを日本人の特性であるとしている。この点も西欧の武人には見られない。

ただこうした「敗北」の理念や「流離」の理念が、全く日本独自なものと見なす考えかたには、私としては、いささか賛成できない。ヘラクレス、オエディプス、ヤソン、ジークフリートなど、数多くの西欧の古典的英雄は、みなそうした経歴の持主であるからである。

私は、こうした「敗北」や「流転」の理念ばかりでなく、これに伴う数々の厄難や試煉などのモチーフも、もともと古代人の「英雄」に対する観念から出た筋書きだと考える。

英雄は神から遣わされ、人間の世界に文化や福祉をもたらす媒介者なのである。半分神の血を受け、半分人間の体を持つ英雄にして、はじめて、祭祀や制度、文物などをおこすことができる。これらの事業は神の意志である。

こうした英雄の事業には、幾多の障害がある。神の建てた秩序を喜ばず、これを破壊しようと企てる邪霊や悪人どももいる。半分生身（なまみ）の人間である英雄は、強い意志と勇気と武技で、これらの厄難や試煉を通り抜けなければならない。もちろん、これに対し、常に神の側からする天祐・冥助がある。時としては死からの蘇生もある。その冥府下りも、いわば不死身の神性のあかしとしての死の克服である。

また英雄は時として、多くの女人から愛され、また時に彼女たちにより危機や死から救い出される。ギリシャの英雄ヘラクレス、テセウス、ヤソンなども、そうした女人によって危険をのがれているし、日本のオホナムチ、倭建命も同様である。『御曹子島わたり』や『浄瑠璃十二段草子』の義経なども同様である。多くの英雄は「恋の英雄」でもある。

英雄は一個の理想的な男性像であるから、多くの女人の愛を勝

ち得る。」、また多くの子を設けることによって、子孫の家々を残した。夭折したはずの英雄たちに、意外に子孫が多いのは、多くの家々でこれを祖先の系譜に加えようとし、そうした浪漫譚を生み出したからである。ヘラクレスや倭建命はその例にもれない。

この英雄が若くして死ぬのは、その神から課せられた仕事を終えたからである。神の目的は、人類の災厄を除き、福祉をもたらすことであるから、その目的さえ成就すれば、神は直ちに自分のもとに召し返すわけである。英雄のこの世での滞留は、人間的な快楽の追求や高い地位への昇進ではないから、不遇の中に夭折しても、その事業さえ果せば、十分なのであった。

こうしたことは、人間の側から見ると、悲劇には違いない。英雄が人にすぐれた知恵や力を持って、数々の功を立てても、一生は苦難と不幸をになっていて、何等現世的に報いられることなく、夭折する。これは不幸の極である。ことにその最後が横死であるような場合は、現実にそうした人物の非業な死に接した人々が、その悲劇性を強調し、死霊を慰撫しようとしたのであろう。

こうした基本的な英雄観は、恐らく世界のどこにでも共通するものであろう。「ヘラクレスと倭建命とが、どこか相似た経歴の「遍歴――、苦難と闘い、不幸な死をとげる若い英雄」であるのは、どちらか一方の説話が伝播したからではなく、両者とも共通な古代的英雄観を根底に持っていたからであろう。

然し、こうした中核理念に、数多くの風土伝承的な話根が結びついたのであろう。ウツボ舟流しとか、大蛇退治などのモチーフや、各種の試煉など、その土地の土俗伝承と結びついた話根や、また当時広く伝播・流布していた説話などが、これに結びついて、そうしたさまざまな英雄伝承が生まれたのであろう。

それにしても、英雄像は、当時の民衆の理想的な人間像であるから、民族・風土によって、多少ずつ異なるのは当然である。ということは同時に、英雄の範型も、やはりそうした独自な項目を持っているはずである。

それでは、日本の英雄の範型とは、一体どのようなものであろうか。これは実際に古代から近世までの数多くの英雄物語の中から抽出されなければならないが、何等の基準も設けないで、日本的なカテゴリーを取り出すことは、容易なことではない。

そこで試みに、ド・フリースなどの範型を基本として、その項目の一々を検証し、何を除去すべきか、あるいは何を代りに設けるべきか、またこれらのほかに付加すべき項目はないか、等々を考慮しつつ、私なりに仮説としての日本の英雄範型論を提示して見たい。これは、全くの私案に過ぎない。将来の修正を待つべきものである。すなわち、

(1) 英雄の未生記

a母ないし父は貴人、b父は神ないし動物、C母が神ないし動物、d父は暴漢。

(2) 異常誕生

a竹、卵、瓢、桃、瓜などからの誕生、b膝、カカトなどからの誕生、c土中誕生、d海中出現、e蛇体の母からの誕生。

(3) 身体的特徴
a背や腋に鱗形、b歯に特徴、cその他の異様な風貌。
(4) 誕生時の厄難
a山中遺棄、bウツボ船漂流、c動物にさらわれる。
(5) 養　育
a狩人・杣人・漁夫などに拾われ育てられる。b動物の間に育てられる。
(6) 成長ぶり
a異常な生育ぶりと超人的な力の発揮、b逆に、初めは成長が遅く、智恵おくれ、人々から馬鹿にされる。
(7) 試煉と漂泊・流離
a謀略による追放、b自発的な流浪、c数々の厄難、時としては死と蘇生。しばしば神の援助がある。
(8) 乙女の援助と愛
スセリビメとオホナムチ、オトタチバナヒメと倭建命、浄瑠璃姫と源義経。これらは、しばしば英雄の危難を救う。
(9) 怪物退治
a龍蛇退治、b猿やヒヒ退治、cその他の怪物。
(10) 他界訪問（冥府下り）
その多くは、呪力、特権、財宝などを得て帰る。オオナムチ、ヒコホホデミ、田原藤太、『御曹子島渡り』や『天狗の内裏』の義経、甲賀三郎など。
(11) 功　業
天下の平定、蛮夷・凶賊の鎮圧、文物の創始、風習・制度・祭祀などの創設など。一般には、功なって自ら支配者となるのではなく、「縁の下の力持ち」としての役にまわることが多い。倭建命や義経など。
(12) 英雄の不死身と急所
英雄はしばしば不死身を得るが、同時に一つだけ急所がある。これを敵に知られることによって、致命傷を受けることになる。将門、景清など。倭建命なども、これがあったかも知れない。
(13) 若くして非業の死。時としてこの際に霊験がある。倭建命や愛護若。
(14) 死後怨霊がたたり、神とまつられる。
(15) 往々、死場所を逃れ、他の地に亡命、余生を送る。従って彼の墓所と伝えるものが幾つかある。
(16) 死に臨んで詩歌を詠む。

以上であるが、この他にもまだあるかも知れない。この中で、最初の方の(1)(2)(3)などの超自然的出生に関連する項目や、(9)(10)(12)などの、神話的・超自然的なモチーフの項目は、もちろん、時代が下るにつれて、薄れ去り、消え去って行く部分であることはもちろんである。また(14)などは、後世の御霊信仰以後に顕著になるものであって、古い時代の伝承にはない。

従って、ここに挙げた範型は、決して永遠に変わらない日本人の英雄範型だと言っているのではなく、各時代における英雄説話

をこの範型の基準に照らして検討し、これにラグラン流の比率法をもって、検証して見るなら、どの時代の説話、どの人物の説話が、この基準のどこまで適合しているのかを知ることができるであろう。

倭建命や義経は、確かに典型的な「英雄型」の人物である。貴い家筋の出でありながら不幸な運命をにない、さまざまな試煉に逢い、冒険を行い、しばしば超自然的存在の助力ないし加護があり、また美女との恋物語があり、各地を漂泊・流離し、最後に若くして悲劇的な死をとげる。ことに倭建命などは、古代的英雄であるだけに、その死は神秘的である。その霊は白い鳥となって天がける。これは彼が普通の人間でなく、半ば神性を持つ存在であったからであろう。

ともあれ、こうした範型を、更に色々と実証的検証によって、定めて行き、日本文学の底に流れる伝統的な人間の理想像を、浮きぼりにすることが、今後の研究課題である。

こうした範型は、また決して近代文芸のモチーフとも無縁ではない。ウエイン・シューメイカーが論じるように、こうした神話的なプロットが、現実的・世俗的なものに置きかえられるとき、多くの近代小説の構成もすぐ認められる。神に代って親、校長、社長、将軍などが登場し、また怪物に代って、闇のボスや巨大な資本主義機構が登場する。英雄の不死身と急所は、内性的な不屈さと、その短所である人の良さや潔癖さなどに入れ替る。地獄への下降は、テロリズムなどのような恐怖の修羅場への冒険となる。然し、中核の理念は、変わらない面を持っている。近代人の意識の中にも、常にそうした非合理的な思惟が働いて居り、それに基づいた人間像が、文芸作品の中に登場することは、当然なのである。

註

① Johann Georg von Hahn, "Arische Aussetzungs-und Rückkehr-Formel," in his work *Sagwissenschaftliche Studien*, 1876. Cited in Alan Dundes(ed.), *The Study of Folklore*, New Jersey, 1965, pp. 142～143.

② Otto Rank, *The Myth of the Birth of the Hero*, New York, 1959, p. 66.

③ Vladimir Propp, *Morphology of the Folktale*, translated by L. Scott, Indiana, 1968, reprinted 1975, pp. 25～65.

④ Propp, op. cit., pp. 119～122.

⑤ Joseph Campbell, *The Hero, with a Thousand Faces*, New York, 1956, pp. 245～246.

⑥ Joseph L. Henderson, "*Ancient Myth and Modern Man*," *Man and his Symbols*, ed. by Carl G. Jung, New York, 1965, pp. 104～132; Same Auther, Threshold of Initiation, Wesleyan Univ. Press, 1967 の河内・浪花訳『夢と神話との世界』新泉社昭和49年。

⑦ Lord Raglan, *The Hero*, London, 1949, pp. 177～189.

⑧ Jan de Vries, *Heroic Song and Heroic Legend*, translated by B.J. Timmer. London, 1963, pp. 210～217.

⑨ Otto Rank, op. cit., pp. 27～41.

⑩ De Vries, op. cit., pp. 206～207.

⑪ Maria Leach (ed.), *Standard Dictionary of Folklore, Mythology*

and Legend, Vol. I, New York, 1949, the article "Alexander."

⑫ De Vries, op. cit., pp. 196～197.

⑬ De Vries, op. cit., pp. 208～209.

⑭ Mircea Eliade, *Rites and Symbols of Initiation*, translated by W. R. Trask, New York, 1965, pp. 124～127.

⑮ Theodor H. Gaster, *Thespis, Ritual, Myth and Drama in the Ancient Near East*, New York, 1961; S. H. Hooke (ed.), *Myth, Ritual and Kingship*, Oxford, 1958.

⑯ De Vries, op. cit., pp. 229～231.

⑰ W. P. Ker, *Epic and Romance*, New York, 1957, pp. 207 sq.; C. M. Bowra, *Heroic Poestry*, London, 1961, pp. 128～131.

⑱ De Vries, *Betrachtungen zum Märchen, besonders in seinem Verhältnis zu Heldensage und Mythos*, Helsinki, 1954.

⑲ William Ridgeway, *The Origin of Tragedy*, Cambridge, 1910; Same Auther, *Dramas and Dramatic Dances of None-European Races*, Cambridge, 1915.

⑳ De Vries, op. cit., pp. 242～253.

㉑ Eiichirō Ishida, "The Mother-son Complex in the East Asiatic Religion and Folklore," in Die *Wiener Schule der Völkerkunde, Festschrift zum 25 jährigen Bestand*, Vienna, 1955, pp. 411～19.

㉒ 金烈圭『韓国民間伝承と民話の研究』学生社、昭和53年。

㉓ 崔吉城『日本の祭りと巫俗』第一書房、昭和55年。

㉔ 金烈圭前掲書。

㉕ 金東旭『朝鮮文学史』日本放送出版協会、昭和49年参照。

㉖ 折口信夫『日本文学の発生』斎藤書店、昭和22年。

㉗ Ivan Morris, *The Nobility of Failure*, A Merdian Book, 1976.

㉘ ウェイン・シューメイカー原著・本田・北市共訳『言語・神話・文学』文理大学事業部、昭和48年。

（まつまえ・たけし　本学教授）